

『あそびの屋台、満員御礼!』



あそびの屋台実行委員長
(榴岡児童館職員) 大久保 潤

7月1日(土)に、宮城県内の児童館・児童クラブが合体し「みやぎ!あそびの屋台 つながるおまつりフェスティバル」(以下あそびの屋台)が開催されました。来場者数は予想を大きく上回る1,505名!当日配布をしたリーフレットが足りなくなるという嬉しいトラブルもありました。あそびの屋台で使える通貨「こどもん」を稼ぐために、児童館スタッフと共にお店の手伝いや、ハンドメイドのお店を出店したり、ステージの大画面をzoomで繋がりポスターをする子ども達の姿も見られました。まさに、子どもの参画が大きく見えた児童館らしいお祭りとなりました。

また、県外から来場した親子や障害の有無も関係なく新しい出会いもあったようです。これは児童館の中では日常の風景なのですが、勾当台公園という大規模な場所でも繰り広げられていた事に感動を覚えました。

大人の参画もまた素晴らしいものでした。当日は宮城県内から約100名の児童館・児童クラブのスタッフ達が集まり運営を担いました。運営スタッフ全員が集まることができたのは当日を迎えるまでに僅か2回だけでしたが、結束力がとても強くエネルギーに満ち溢れていました。運営団体の壁を越え、市町村も飛び越えて、約1年間の準備期間の中で私達は仲間となりました。会議で集まった際も情報交換が頻繁に交わされ、将来の児童館像や大人(私達)の関わりについても話題になり、熱く語り合いました。普段の児童館業務の悩みも打ち解け合ったからこそできたのかもしれませんが。

今の時代だからこそ「リアルな繋がり」の重要性に気が付く事ができ、実行委員からはこんな声が聞かれました。「自分の現場だけでは視野が狭くなりがちで、他の団体や現場の方と出会い、話すことで視野が広くなりました。この仕事が楽しくなりました。」はとても嬉しい一言でした。実行委

員の大多数は20代~30代で、これからの児童館・児童クラブで活躍する世代です。この横の繋がりとプロセスは間違いなく大きな財産となりました。

私達は「こどもがまんなか」というテーマを掲げ、運営を続けてきました。これは全国児童館・児童クラブ宮城大会の時から掲げているテーマです。私達が生きる地域社会で、子どもを中心に置き、大きな大人が小さな子ども達を見下ろすことなく、膝をついて同じ目線で見つめていきたい。そんな思いが込められています。今回の遊びの屋台はまさに子ども目線で行われ、大人側にも童心を思い出した瞬間が沢山見られました。笑顔が飛び交い「楽しい!」という声も沢山響きました。今回のためにオリジナルソングも制作しました。その歌の中にこんな一節があります。「〇×△□でもいいんだよ。数ある感覚の中で、みんな生きている」。

近年、多様性という言葉をよく聞きますが、大人も子ども目線になれば、自然と認め合う事ができるのかもしれませんが。そんな事も気付かせてくれました。この繋がりが、たった一度で終わるのは勿体ない。これは全員の共通の思いでした。次は何をしようか?そんなワクワクさもあります。あそびの屋台は閉幕しましたが、この大きな仲間の輪は絶やすことなく、更に大きく・深くみんなで育てていこうと思います。

